置賜創生懇談会　会議録要旨

〇日　　時：令和４年５月24日（火）14:45～16:15
〇開催方法：Web会議方式
〇出 席 者：別紙のとおり
〇次　　第：
　１　開会
　２　あいさつ
　３　意見交換　テーマ「ポストコロナを見据えて」

（１）１巡目「ポストコロナを視野に入れ、現在の活動を踏まえ大切にしていることについて」

■伊藤　優子さん

〇２点お話しさせていただきたい。１点目にSDGsについて。企業として、SDGsに取り組んでいるかどうかで、世の中の評価が分かれる。その中で、国連のSDGsメディアコンパクトに会社が加盟した。地域の皆さんが取り組んでいるSDGs活動を積極的に紹介することで、皆さんに自分事に感じてもらい、こういう事例なら私達もできるという視点を持っていただけるようにと現在活動を行っているところ。

〇２点目はｅスポーツについて。国内でもｅスポーツを地域の活性化に繋げよう、結び付けようという動きがあちこちで起こっているが、米沢市でもｅスポーツの協議会を立ち上げて町おこしに繋げようという声があがっている。ｅスポーツの可能性について３点紹介すると、１点目が高齢者のヘルスケアへの活用。実際に米沢市内のデイサービスで、高齢者がｅスポーツを楽しむことで、認知症の改善に繋がるかの実証実験が行われている。２点目に、教育分野への応用。ｅスポーツとプログラミング教育を結び付けて、ゆくゆくは学校に、高校を中心としてｅスポーツ部ができてくれればよいと思っている。３点目はｅスポーツ商店街。例えば事業再生交付金を使って、ｅスポーツの施設を整えて集客、ビジネスに結びつけるもの。米沢市内でそうした動きがあるので、会社としてもバックアップしていきたいと思う。

■遠藤　茜さん

〇現在、私が所属している２つのボランティアサークルについて紹介したい。１つ目がボランティアサークルポプラについて。活動内容としては、地域の祭りを手伝ったり、地域の方との交流会を企画したりしている。昨年は主に、昨年度初めて米沢で開催された、紅花まつりの手伝いを行った。紅花の種植えから始め、一から紅花を育てたり、紅花染めをした糸を使って、地域の方から教わりながら刺し子体験をした。地域の方との交流が多く、活動をとおして、紅花の生産や加工に携わっている方、祭りを運営する方々それぞれが米沢という土地に愛情を持っていると感じた。また、活動に参加する中で、地域の人々が大学生を受け入れてくれ、米沢の良さや魅力を熱く教えてくれることを感じた。米沢を良くしたい、貢献したいと思っている大学生は実は多いと思う。今はコロナ禍で、地域の方との結びつきというのが薄れているが、そんな中であるからこそ、学園都市という米沢の強みを活かしながら、地域の方と大学生の交流をとおして、米沢がよりレベルアップしていければ良いと思う。

〇２つ目の活動であるボランティアサークルチューリップでは、聴覚に障害のある学生さんをサポー

トすることとして、一般の学生と同じ場所、スピードで授業が受けられるように、教授が話をした内容をパソコンで文字おこしする活動を行っている。50 名以上がサークルで活動しており、大きな動きとなっているので皆さんにもぜひ知っていただきたいと思う。

■黄木　修太郎さん

〇米沢牛の生産から販売の一貫販売の観点からと、道の駅米沢を通じての、ものづくりや観光振興の観点からお話したい。米沢牛の価格は、コロナ禍であっても高値水準で動いている。飲食店の需要は低下しているが、巣籠りや、在宅ワークの需要で、通信販売がもの凄く増えている。それに加え、海外輸出の商談が増えているが、残念ながら海外輸出向けの出荷については、米沢でまだ食肉公社の施設は整っていないので、西日本の黒毛和牛と比べると後れを取っている。ただ数年後には、食肉公社の方が輸出向けの施設整備を行うと聞いており、これからは、山形牛と米沢牛のおいしさを世界に向けて発信していくことが重要だと考えている。

〇米沢で３年ぶりに上杉まつりが開催され、４月 27 日には、道の駅福島がグランドオープンし、近隣でも新規の道の駅が続々とオープンしている。気象情報、道路情報、災害情報との連携については、関係官庁の指導を得ながら進めるのではないかと考える。一方、道の駅ごとにその特色を最大限に発揮するための連携については、競争関係にある中で、多くの課題が想定される。こうした中、道の駅米沢は近隣の道の駅をライバル視するのではなく、地方創生のビジネスパートナーという位置づけを持ちながら、課題を一つ一つ丁寧に解決しながら連携を深めていくことが大事だと考えている。

■大垣　敬寛さん

〇私は米沢で STEM 教育や探求教育に取り組んでいる。山形から新しいものを生み出し、作り出していく人材を育てたい。単純に勉強ができるということではなく、小学校から高校生までのうちに、できるだけ社会と関りを持ち、こんな世界があるということを知り、明確にした上で、勉強に取り組んでいく必要があると感じている。実際に社会と繋がりながら、自分達で実践し、どんなことを勉強する必要があるか気づくことが大切である。

〇コロナによって世界中の方々と繋がりやすくなった。ポストコロナを見据えると、コロナ前の環境に戻ることはないので、ネット越しでできた浅い繋がりが、実際に会ってより連携していこうという話になっていけばよいと思う。中学生、高校生のうちから海外の方と一緒に何かに取り組んでいく経験ができる世の中になっていくと思う。

■斉藤　幸恵さん

〇これからは、若者や人への投資が非常に重要だと思っている。人を育てるということは、すぐに結果が出ることではないし、どうしても経済的なものに力を入れざるを得ないというのが今までだったと思うが、これからは、教育や人材づくりに力を注いでいかなければならない。

〇コロナによって変わった環境について、良い面と悪い面があると思っている。大垣さんがおっしゃったように、オンラインで、全国、世界とつながることができるのはとても良いが、画面越しだと五感を使わない。私自身、山に山菜を取りに行くと、葉の風になびく音や、クロモジの香り、大地を歩く感覚を経験するが、そういったものは人間にとってとても大事なものだと思う。特に、山形県は自然が美しく、実

際に目にしないと味わえない感動がある。また、子供を育てるうえでも、対面というのはとても大事であるが、現在子供たちは、給食や授業の時にマスクをしなければならず、この生活が２年間続いている。

■平　浩一郎さん

○２点お話ししたい。まず、地域の食品製造について。当社はこんにゃくのほか、豆腐、油揚げなど大豆加工品を製造しているが、大豆、食油の価格が今まで経験したことのない幅とスピードで高騰しており、収支のバランスが取れていない状況。コロナの影響もあり、原料の輸入大豆が日本に入ってきていないことが価格高騰の要因となっている。安定的な原料確保の点から、県産大豆使用にシフトしていくことも真剣に考えている。この難局を乗り切ること、またポストコロナにおいては、地産地消、差別化、地域との繋がりなど、山形にこだわったものづくりが改めて重要だと思っている。

○もう１点は、物産展について。コロナ前は、百貨店の物産展は多い時で年に４．５回出店していたが、ここ２年間は出ていない。中止になるものも多いが、開催されても客の入りは半分ほどと聞いている。ポストコロナにおいても、元のようには戻らないと思う。物産展にはもちろん、商売として出店するわけだが、山形の食文化を客に伝えるという使命感を持って出店していた。実際物産展が、山形の食の PR、山形のイメージアップに大きな役割を果たしてきたと思うが、これがもし衰退していくとすれば、長い目で見れば影響が出てくるものと思う。都会の人の山形の食に対するイメージは、県民が思っているより良いと言われる。物産展の現状、果たしてきた役割を踏まえ、新たなイメージ戦略なども必要と感じている。

■髙橋　千夏さん

○米沢市で木製サッシを製造している。従業員 23 名、平均年齢 32 歳の若い職人でものづくりを行っている。

○私からは大きく２点ある。１点目はものづくりについて。ここ数年コロナ、ウッドショック、ウクライナ紛争、円安などさまざまなことがあった。そこから学んだことは、いかに平時に備えるかということである。また、カーボンニュートラルの実現に向けて、家庭分野では家の高断熱化は必須である。2025 年にやっと住宅の基準を決めた法律ができるので、森林ノミクス山形も先進して進めていきたいという思いがある。住宅の取り組みとしてはトップランナーとして、鳥取県の鳥取 Ne-st という国の基準より厳しい基準を設定していることが注目されている。山形県は他県に比べて、２世代、３世代で暮らしている人も多いので、その視点もいれつつ、住宅分野の取り組みを活発にしていきたい。

○２点目として、地域の活性化について。私のような、30 代、40 代前半の子育て世代はコロナを経験して、このままで良いのかと非常に考えたと思う。自分の地域をどうしていくかという議論が米沢のあちこちで起こっており、それが様々なところで最近芽を出してきたように思う。例えば、米沢市版 DMO も立ち上がり、その立ち上げメンバーは私と同世代である。また、まちづくり会社であるウコギ社は、古い建物をリノベートしてまちづくりに取り組んでいる。県では「人と自然が生き生きと調和し、真の豊かさと幸せを実感できる山形」を目指しているが、真の豊かさとはどういうことか。これからの時代、ますますグーグルやアマゾンのようにすごく大きくなるか、本当に小さいことの強みを活かすときに、無意識に大きい方がよいと選択するのは、真の豊かさに繋がらないと思う。米沢市は規模感としてはコンパクトシティである。米沢、置賜地域の規模感だからこその価値があると思うし、その強みを活かしていくし

かないと思う。そういったことを議論できる同世代の方があちこちにいることに、私自身感化されている。

■山上　絵美さん

〇私が働いているやまがた里の暮らし推進機構では、交流事業を実施し、川西ファンを作るという活動を行っているが、この２年間は非常に苦しいものがあった。一番活動する上で恐れたことは、これまで培ってきた、都市部の方との関係性が途切れてしまうこと。そのような中、非常に助かったのが SNS やオンラインの存在だった。

〇オンラインで郷土料理教室をやったり、味噌を作ったりした。お年寄りも気軽に参加してくれ、逆にこれまで対面型では出会えなかった、北海道や京都、大阪、岡山の方などとの新たな関係性を作ることができた。また、会えないからこそ募る思いというものもあり、強く川西町の事を思ってくださる方もいる。2019 年にツアーを開催した時に参加された方が、その年に年間８回来てくれた。その後コロナになってこちらに来られなくなり、川西町の豆を使った料理を毎日 SNS にアップしてくれている。フォロワーも多く、私達ができないようなことをファンの方がやってくれており、とてもありがたいと思っている。

〇課題として、SNS やオンラインの活動というのは、理解されづらい面があり、私達の組織が何をやっているかわからないと批判を受けることもある。

（２）２巡目「（１巡目を掘り下げて）ポストコロナを見据えて、皆さんが大事にしていること」

■伊藤　優子さん

〇観光について、先ほど黄木社長も話されていたが、３年ぶりに上杉まつりが開催され、ケーブルテレビで、武てい式と川中島合戦を生中継した。実は今回新しい取組みとして、新潟、函館、米沢の NCV の３拠点で同時生中継にトライした。さまざま反響があり、新潟県の女性の方から、川中島は山梨県ではないか、まさか米沢でこんなに大きな祭りをやっているとは知らなかったという意見をいただき、もっと PR する必要があるなと改めて感じた。今回 Youtube 広告を入れて祭りを PR したが、3 年前に同様の PR をした時より再生回数が 10 倍になっていた。

〇今回の現状を見て、観光行政を批判するのではなく、私達の力で広められることはやるべきだと改めて思った。全国にケーブルテレビの横の繋がりがあるので、ゆくゆくはそちらのほうとも連携して、米沢の代表的な祭りなどを発信し、地道に行っていくことで観光の方にも結び付いていくのではないかと思う。

■遠藤　茜さん

〇皆さんからもオンラインの普及について話があったが、私も大学でオンライン授業を経験して、友達ともなかなか会えず、サークル活動もできなかったりと心苦しい時期も過ごしたが、そんな中でも助けてくれたのが、地域の方だった。コロナ禍で１人暮らしが苦しくなった学生のために、大学周辺の地域の方が食糧支援という形で、お米やトイレットペーパーなどを大学に寄付してくださり、学生 200 人ほどに提供された。ボランティアサークルポプラの方でも、地域の方と一緒に仕分け作業を行うなどした。大学生は地域の人に助けられていると感じており、繋がりを大切にしていきたいと感じている。

〇先ほど、地域に貢献したい大学生は意外とたくさんいるという話をしたが、何をしたらよいかわから

ない、行動したいが何から始めて良いかわからない学生も多いと思う。活動やイベントについてはSNSでたくさん発信されていると思うが、発信されたものをどうやってやりたいと思っている人に届けるか、届けるまでの過程が大事だと最近自分自身気づいた。米沢の学生は、地域との繋がりを大事にしている人が多いと思うので、それが米沢の強みとして大きくなっていけばよいと思う。

■黄木　修太郎さん

〇米沢牛について今後販路が拡大されるための一番の課題は、生産量である。現在、年間で約3,000頭ほど出荷しているが、今後どのように増やしていくかが大事であると考えている。置賜エリアでの繁殖頭数を増やしながら、できれば置賜生まれの置賜育ちという、新たな高付加価値を生み出すようなプレミアム米沢牛を作ることを目標においている。また、品質についても更に美味しさを追求するために、米沢牛銘柄推進協議会のほうでも、肥育期間は、現在32ヵ月月齢以上だが、それを1か月延長し、33ヵ月にすることを目指している。

〇一方観光においては、このコロナ禍で需要が落ち込み観光業が大変厳しい状況におかれているが、これまでの取組みや蓄積に加えて、新たな視点やスキルを持つ人材による観光推進体制が不可欠であり、DMOの設立が急務になっていたところ、この度5月13日に米沢市版DMOの設立総会が行われた。今後は、幅広い観光データの収集と分析を行うシステムを構築し、明確な戦略を策定し、地域の稼ぐ力を引き出して持続可能な観光まちづくりを目標にしたいと考えている。私も米沢の観光推進機構のメンバーなので微力ながら地域経済の活性化に寄与して参りたい。

■大垣　敬寛さん

〇遠藤さんから話があったが、私も大学生と話す機会があり、最近の大学生はオンラインで学校に行けなくなったことによって、従来のサークル活動など自己表現をする場が少なくなってきていると感じている。

〇私の紹介の際、東大スタディーフィールドについて触れていただいたので紹介すると、それぞれの自治体と連携して、その自治体の課題を解決するために何ができるのか一緒に考えようという取組みである。その活動をきっかけに繋がってくれる方も多く、鶴岡のプログラムに参加し、そのまま一時的にではあるが移住している大学生が２人もおり、あまりアクセスのよくない地域にも入っていって何かしたいと活動している。私が運営している探求塾ESTEMでも、遠隔で手伝ってくれる東大生や、北大生などがいて、地域や子供達のため、これからの教育のために何かしていきたいと、それぞれの専門分野を子供達に伝えることで自分達の学びも深めたり、大学生側が新しい知識を得たりする取組みが進んでいる。

〇課題としては、そういうオンラインの薄い繋がりから、鶴岡の例のように、実際山形に来て住んでくれる人を増やしていくこと。最近大学生も休学して１年どこかに行くということも抵抗がなくなってきているようだ。オンラインが浸透して、休学して別の事をやるというのも当たり前になってきている。そういう方々にどんどん山形に来てもらって、一人ずつ繋がりをもっていただくと、これまでできなかった取組みや、新たな地域の魅力の発掘、発信に繋がると感じている。

■齊藤　幸恵さん

〇コロナ禍で、遠藤さんも地域の方に助けられたというお話だったが、遠藤さんのように向上心があっ

たり、大垣さんのところに来る熱意がある大学生だとよいのだが、コロナ禍で世の中に置いていかれているように感じている子や、やる気を失っている子もいると思う。学生の時にこういう時代を過ごして嫌な思いをしている若者も多いので、そういう子供達に対して何かしてあげたい気持ちがある。

〇平さんがおっしゃっていた山形の食の魅力については、私自身さまざまな山菜を県外に送ったりするが、味が違うと言われたりして、山形の食品の評価は高いと感じている。山形県は中央の東京などを目指さず、山形独自の山形の良さを追求していけば良いと思う。髙橋さんがおっしゃっていた真の豊かさという事に非常に共感した。人間には大きく、大きく見せたいという気持ちが根底にあると思うが、大きさではなく何に重きを置くかということが大事なのだと、山形で暮らして感じているところである。

■平　浩一郎さん

〇ポストコロナというのは大きなテーマであるが、豆腐、油揚げなどの地域食品は、人口減少、市場縮小への対応というのが最重要課題だと思っている。品質重視、地産地消、地域の伝統食品を守っていくというのが大事になってくる。先ほど、県産の大豆の使用について話したが、豆腐でいえば国産、県産というものを使えば、いくらか高くはなるが、地産地消ということで、毎回ではなくても皆さんに購入いただき支えていただきたいという思いがある。今、長井の商工会議所の商業部会で、buy 長井プロジェクトというものをやっている。長井産のもの、長井で作られたもの、長井で買い物をしよう、長井の業者に頼もう、とちょっとだけ意識をして購買力を地元に留めて、地域内循環を高めるプロジェクトである。県全体でも山形のものを消費しようという雰囲気が、少しでも自然な形で高まってくればよいと思っている。

〇看板商品である玉こんについてだが、国や県の補助金を活用させてもらい、生産ラインも整備できたので、山形名物として本場山形の味をもっと全国に拡販していきたいと思っている。山形はとても良いイメージを持たれているということもあるので、目一杯 PR したい。

■髙橋　千夏さん

〇ポストコロナにおいて、本質的にどうなのかを県民も米沢市民も考えながら過ごしていくことが大切だと思う。我々ものづくり企業がお客様と接すると、本質的なものの良さを求めていることを感じる。本当に良いものはなんなのか、真の豊かさとはなんなのかというのを突き詰めたうえで、ものづくりをしていきたい。

〇皆さんもおっしゃっていた、オンラインとオフラインについてだが、我々自身も情報リテラシーを高めていかなければならないが、使い分けていければ幸福度が上がると思っており、子供達は簡単に使い分けられるようになっていると感じる。オンラインで緩い繋がりを作って、オフラインで実際会って固めていく、ということを簡単にやれている。例えばオンラインで繋がって、実際キャンプなどの体験から受け止めきれないような感覚を肌で感じるというのがうまいと思う。ポストコロナにおいて、子供達は大変な時期を経験したわけだが、それを乗り越えて良い部分を活かしていく世代が育っていることを楽しみに思っている。

■山上　絵美さん

〇ポストコロナを見据えて、私自身は、繋ぐ、活かす、ということを重要視している。今来られなくなったということもあり、情報発信をすると、山形に行きたい、風景を見たいというお話をたくさんいただ

く。一方農家の方は苗運びであったり、田植えに手が足りないという話もある。そこをうまく繋いでいけるようにしたいと考えている。

〇もう１点、活かすということについては、川西町も高齢化率が高くなってきていて、それをネガティブに捉えがちであるが、１例を紹介すると、藁細工会というものがあり、しめ飾りやしめ縄、門松などを作っている。そこに例えばトナカイを作ってとお願いすると、簡単に作ってくれる。そういった熟練のマイスターの方がこの町にはたくさんいるので、そういう方々と一緒に動くことができる町にしたいと考えている。弱みを強みに変えていくというのは、コロナ禍にあって強く思うところである。